

## 台湾への臨床実習留学を経験した成果

留学期間 2019年6月10日～6月28日

留学先病院

1週目：國泰綜合醫院 Cathay General Hospital

2週目：新光吳火獅紀念醫院 Shin Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital

3週目：天主教耕莘醫院 Cardinal Tien Hospital

台湾輔仁カトリック大学(以下 FJU)との交換留学生として提携する3つの民間病院で実習をさせていただきました。日本と台湾の診療・病院実習の違いを実際に体験することができ、また、病院のスタッフの方、FJUの学生と交流することが出来ました。

### 6/8(土)、6/9(日)

台湾桃園空港まで台湾の学生が迎えに来てくれており、大型タクシーで最初の寮へ移動しました。1週目の病院からシャトルバスで40分ほどの場所に寮があり、毎朝シャトルバスで通うかたちでした。

(寮・・・2人部屋、洗濯機と乾燥機2台ずつ(各階)、ウォーターサーバー)

### 1週目：「國泰綜合醫院」

#### ○神経内科 Neurology

主に病棟での実習で、どの先生方も入院患者さんの状態を丁寧に説明してくださいました。日本と違い、台湾の病院には看護師と医師の間に NP (nurse practitioner)の方がおり、神経内科では3人の医師に3人の NP がそれぞれペアとしてついており、医師の診療をサポートしていました。また、病棟の9割の患者さんは脳卒中で、外来を見学する機会はなかったため、認知症等の疾患はみることが出来ませんでした。入院患者さんの年齢層から、台湾でも日本同様に高齢化が進んでいることが分かりました。台湾では介護として東南アジア等の国から外国人を雇うシステムがあり、特に高齢の患者さんにはそれぞれ介護スタッフ(台湾では「外籍看護、外勞」と呼びます)がついていることが多かった。この外籍看護の方は、一昔前はフィリピンの方が多かったようですが、現在は他の東南アジアの国々の方も多くいるようです。

同時期に FJU の学生が神経内科で実習しており、彼が翻訳してくれながら、患者さんへ神経診察を行ったり、検査を見学したりと、たくさん助けてくれました。また、彼がちょうど論文のプレゼンテーションを行う予定になっていたのも、せっかくだからと、私も一つ神経内科分野の論文を読み、PowerPoint でプレゼンテーションをする機会を頂きました。

6/15(土)、6/16(日)

土曜日の朝に、大型タクシーを手配していただき、午前中には 2 週目の寮へと移動しました。寮は病院まで徒歩 10 分の場所にあり、近くにコンビニやカフェがあり、MRT の駅も徒歩圏内でした。

(寮・・・4 人部屋、2 段ベッド、洗濯機(NT\$20)、乾燥機(NT\$10)が数台 (屋上)、ウォーターサーバー (各階))

2 週目：「新光吳火獅紀念醫院」

○小児科 Pediatrics

小児病棟、NICU、外来、postpartum nursing center で実習をさせていただきました。皆さんとても熱心に教えてくださり、忙しい診療の合間をぬって丁寧に説明していただき、なかなか出会えない症例があればすぐに呼んでくださったり、時間がない時でもメモに重要な項目を走り書きしていただきたりと、本当に密度の高い 1 週間でした。

<NICU にて>



台湾では、産後 1 か月ほど postpartum nursing center に滞在するケースがあり、穆先生の診察に同行させていただきました。今回は天母というエリアにあるところへ行きましたが、このエリアには日本人学校、インターナショナルスクール等があり、高級住宅街の一つだそうです。ドクターによる診察の後は、それぞれの部屋のお母さんに内線電話で赤ちゃんの状態を医師が報告するかたちでした。高額ですが、スタッフの方のかなり手厚いサポートが受けられ、産後の体をゆっくり休める環境が整っていました。



6/15(土)、6/16(日)

金曜日の夕方に移動しました。今回も大型タクシーを手配していただき、3 週目の寮へと移動しました。寮は病院まで徒歩 2、3 分の場所にあり、とても近かったのでお昼休みに戻ることもありました。

(寮・・・4人部屋、2段ベッド、洗濯機(NT\$20)、乾燥機(NT\$10)が1台ずつ、ウォーターサーバー)

### 3週目：「天主教耕莘醫院」

#### ○一般内科 General Medicine

基本的には先生方(主にレジデント)に病棟業務を見学させてもらい、外来と救急外来も空いた時間に少し見学させていただきました。この病院は海外の医学部を卒業した学生や、海外出身の医師のレジデントの方を多く受け入れており、特にミャンマー出身の医師が多くいらっしゃいました。もちろん中国語も英語も流暢で、受け持ちの患者さんの説明だけでなく、過去の印象的な症例もシェアしてくださいました。



台湾の保険証「健保卡」は、名前、写真、ICナンバーが記載されており、この機械で読み取ると、内服歴や画像などの情報を得ることが出来ます。また、台湾ではどこでも同じ機械が使われています。健保卡は受診時に必ず持参するものですし、日本ではお薬手帳がありますが、台湾の健保卡の仕組みは医療スタッフ・患者の両方に良い仕組みだと思いました。

黄先生のご厚意で、teaching OPDにて実際の患者さんに問診・簡単な診察をする機会を頂きました。teaching OPDは12部屋あるOSCE受験用の部屋で行われ、患者さんの同意が得られた場合、学生が実際に行うことができます。試験では、最近は評価者も部屋の中にいるようになっているようですが、マジックミラーのようになっているため、部屋の外で見て、何かあればマイクを通して話すこともできるようです。私は、全てを中国語、台湾語で行うのは難しかったので、看護師の方と先生が翻訳して助けてくださいました。

他にも、最近購入したというトレーニング用のシミュレーションマネキンやスキルスラボを見せていただいたり、毎日行われる、教育目的の内科のミーティング(レジデント、PGY、NP、学生が参加)に参加させていただいたり、とても充実した毎日を送ることが出来ました。

#### 全体を通して

○医療英語を使う大切さを痛感しました。日本で医療英語を勉強していたのですが、やはり日常的に「使う」までのレベルには達していなかったと思いました。問診や身体診察は中国語または台湾語でしたが、カルテ、紹介状、画像のレポート等は全て英語で書かれていて、学生自身がカルテを書く際も難なく英語で書いていました。台湾の学生は多くは英語の教

科書で医学を学んでいるので、日本語の教科書が多くあるのが羨ましいと言われましたが、私も彼らを見習わなければと思います。

3週間と短い間でしたが、スタッフの方や患者さんとコミュニケーションするために、英語を使わなければならない環境に身を置くことは、やはり、とても良い勉強になりました。より多くの情報に触れられるよう、普段から使うことを意識しながら、勉強を継続したいと思います。

○1週目に、FJU 学生が受けた OSCE の試験結果説明会が行われるとのことで、私も参加させていただきました。国家試験の OSCE に関する説明も併せてされていました。今回の試験内容は、動脈採血、NG チューブ・フォーリーカテーテル挿入、縫合などの処置で、評価は説明内容、処置の正確さ等と小項目があり、100点満点で採点されていました。日本で私たちが受験した OSCE では、自分の成績や小項目の評価のフィードバックはなく、学年全体のフィードバックのみだったので、個人の評価が分かるのはとてもいい制度だと思います。

#### 最後に

海外での3週間臨床実習では、本当に想像以上の経験をさせていただきました。今回の交換留学に際して、ご尽力くださった佐賀大学の小田先生、福森先生、青木先生、木本さんをはじめとするスタッフの方々、また、台湾での実習にてお世話をして下さった輔仁大学の先生方、3つの病院のスタッフの方々に心より感謝を申し上げます。今回の留学に際しては奨学金もいただき、金銭面でのサポートも得ることができました。

このプログラムに関して、お力添えをしてくださった皆様、本当にありがとうございました。

## 台湾への臨床実習留学を経験した成果

まず初めに、今回の留学に際して様々なお力添えをいただいた青木先生、福森先生をはじめとする国際交流部会の先生方、台湾でお世話してくださった病院の先生方、佐賀大学および医学部同窓会、医学部後援会に心より感謝いたします。貴重な機会をいただき大変有意義な留学をすることができました。

今回 2019 年 6 月 10 日から 28 日にかけて、台湾での臨床実習留学に参加しました。3 週間の実習期間 の中で 1 週間ずつ 3 つの病院を回らせていただきました。

### 【1 週目:国泰綜合醫院 Cathay General Hospital】

1 週目は general surgery での実習でした。月火金が手術日ということで手術を見学し、それ以外の日は外来見学や学生回診がありました。見学した手術内容としては、多くはヘルニアに対するものでした。他には乳がん、胃がんの手術を見学しました。この病院にヘルニア手術の名医がいらっしゃり、ほぼヘルニア手術が手術の大半を占めているそうです。全く実習で見る機会がなかったため良い経験となりました。手術中は何が見えてるか何をしているか英語で説明してくださり、術後にさらに一般的な知識についても説明してくださるのでとても勉強になりました。

また、Cathay には学生外来があり、普段学生が座る所に先生が座り、先生が座るところに学生が座り、新患を問診し必要なことを考え実行するという機会がありました。とても面白い機会だと思います。また、台湾では基本的に外来一部屋に看護師が 1 人ついており、患者さんの次回の診療予約やオーダー、次の患者さんの呼び込みを看護師が行っているそうです。そのため医師がまだ話していても終わりそうになったら患者さんを看護師が呼び入れていて、患者さんが部屋の中で交代したりしていました。外来人数が多いためこのようなことが起きてしまうそうです。ですがこれは問題にもなっていて、無くそうという話はあるものの未だに完全には無くなっていないと先生は嘆かれていました。また外来や学生回診を担当していた Dr.Ren は大のサーフィン好きで毎回自身のサーフィン姿を写真で見せてくださいました。

### 【2 週目:新光吳火獅記念醫院 Shin Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital】

2 週目は小児科で実習を行いました。内容としては、新生児室や NICU・PICU、循環器超音波検査外来、一般外来、nursery center を見学させていただきました。また朝に症例発表の時間があり、勉強的な症例を私たちがいたこともあり英語で発表してくださいました。nursery center は母親の負担を減らすことを目的として、産後 1 か月まで新生児と母親が滞在できる施設で、台湾では産後一ヶ月母体を休めることが大切とされているそうでとても common でした。新生児専門の Dr.Mu が連れて行ってくれました。この施設は一泊 3 万

円程であり、一ヶ月滞在するとなると相当な額になるなど驚きました。ざざっと検診を行い電話にて結果報告を行っていました。日本にはない制度で興味深かったです。

また超音波検査外来では 2 週に一度台湾大学から来たエコーの有名な先生が検査を行っていました。小児の心疾患をあまり実習で見ることができなかつたので疾患を説明しながらエコーを見せて下さりとても面白かったです。また日本語を話せる先生がいらっしゃり、とても気にかけてくださりました。毎日とても充実していました。

### 【3 週目:耕莘醫院 Cardinal Tien Hospital】



3 週目は family medicine での実習でした。この病院はカトリック病院で、礼拝堂もありました。

初日に烏来という場所に原住民の泰雅(タイヤル族)の回診をしに行くところに連れて行って下さいました。回診では原住民の暮らしを見て、家の中に虫が湧いていたり、ゴミが外に溜まっていたりと経済的厳しさを感じました。また山中に二箇所クリ

ニックがあり、そこでしばらく待機しましたが患者さんは全部で 3 人のみでした。その中に痛風の方がいらっしゃり、ものすごい数の痛風結節が両手に散在しており、手の原型が分からないほどで、衝撃的な所見でした。この村では、痛風の方がとても多いそうです。とてもお酒をのまれることも理由の 1 つですが、遺伝的要因が強くあるそうです。少し治っては酷くなるまで放置し、手がつけれなくなるとはまたクリニックに戻って来るそうで先生が何のために治療をしてあげているか分からなくなり、医療へのやる気も削げそうだと嘆かれていました。

その他の日は外来見学でした。一般外来が基本ですが火曜午後に乳がんの外来見学が一度ありました。診療は中国語なため会話はわかりませんが、カルテが英語で書かれているのでそこから情報収集していました。患者さんが多く先生方はとても忙しそうでした。Family medicine には入院患者さんはおらず外来のみです。診療内容としては高血圧、糖尿病、風邪が多く、また禁煙指導外来も行なっているということでした。先生方が忙しい中でも、外来が落ち着いた頃などに説明して下さりました。

### 【全体を通して】

働き出してから臨床で海外に留学するのは大変だと聞いていましたが、今回は学生の間で海外で臨床実習を行う最後の機会だと思いぜひ私も行ってみたいと思い応募しました。もともと好奇心旺盛な性格で、旅行ではいろいろな国を訪れていましたが、医学留学目的で訪れたことはなく、新たなものを多く見て感じるいいチャンスになると確信しました。私の



両親が国際結婚しており、父が旅行会社を営んでいることもあり昔から英語に親しみをもち、接してきました。二度イギリスに短期留学に行ったり、海外の友達と連絡をしたりとなるべく英語に触れようとしてきてはいましたが、私自身も未だに英語での会話力には自信がないのが本音です。読み書きできても、いざ喋るとなると自分の本当に伝えたいことが言えないもどかしさを感じていました。

世界共通言語の英語は話せてあたりまえの時代の今ですが、日本では周囲を見ているとあまり英語を流暢に話せる人が少ないと感じます。英語は日本人にとっては第二言語でありますし、英語を話す機会も自ら求めなければならないと思います。また、シャイな性格の日本人はお互いがどれほど英語を話せるかを全く他者に見せない印象もあります。

今まで、海外の医療現場での臨床留学経験は一度もなく、なにもかも初めてで不安でいっぱいになりながらも、同じアジアの台湾でどれほどの違いがあるのかと疑問に思いながら台湾へ向かいました。まず、最初に驚いたのは台湾の学生どうしが何のはばかりもなく、お互いに英語で会話していたことです。私たちの学校に交換留學生がきた時には見たことのない光景でした。日本では簡単な挨拶程度を英語でしたあとはお互いが単語でぼろっと英語を話すくらいでなんだか英語を話せることが恥ずかしいかのような雰囲気がありました。台湾の学生たちは、私たちも会話に参加できるようにお互いに話す時も流暢な英語で話してくれたのです。また、台湾の医学の教科書、院内のカルテ、プレゼンテーションのスライドは全て英語で書かれていました。日本では日本の医師達が出版した日本語で書かれた教科書が一般的ですが、台湾では、海外からの医学書を英語のまま読む方が一般的で、国内の医者が中国語で教科書を出版することは稀だそうです。もちろん台湾の方々皆さん英語を話せるわけではないので、診療は中国語(台湾語)で行われていました。台湾でも英語は第二言語であるはずですが、医療現場の方々で英語を話せない人はほぼ0と言っていいほど、身近に英語を使っていました。海外留学を経験している医師も多く、日本と同じ島国でも海外への意識がまったく異なる印象をうけました。同じ土俵にいるはずですが、ここまでに差があることに驚き、またどこからこの差は生まれたのかと不思議に感じました。

今回の留学で痛感したのは、自分の medical term の無知さです。台湾の学生は医学書が英語だということもあり、すべての疾患を medical term を用いて、患者について母国語で話すときさえも話していました。帰国後から積極的に medical term を使うこと、また恥ずかしがることなく堂々と英語を話していこうと感じました。今後、将来的にまた海外の臨床現場に学びに行く機会があれば積極性を持って参加したいと強く思いました。今回、海外留学に行くことができ貴重な経験ができ本当によかったです。ありがとうございました。また、外来見学时に患者さんが自分の意見をはっきりと述べ納得いくまで説明を求めている場面が日本より多く感じました。これは日本と台湾の国民性の違いの現れではないかと思いました。控えめな日本人に比べハッキリと自分の主張を述べる姿に驚き、興味深く感じました。私の母が韓国人であり、韓国でも自分の主張をしっかりと述べている印象があり、同じアジアの国の中でも控えめで shy な姿は、日本の特色だと感じます。

また、台湾の方々には歓迎のおもてなしが非常に素晴らしく毎日退屈しないようにとどこかしら連れて出てくれました。毎日、台湾のローカルご飯や名物を食べたり観光地に連れて行ってくれたりと、私生活もとても充実していました。

この3週間で日本とは違う医療現場を経験する事ができ、本当に素晴らしい経験となりました。将来、次は医師として海外へ留学、勉強しにいきたいと強く思うとともに英語の勉強を頑張ろうと思いました。繰り返すにはなりますがこのような機会を与えてくださり本当にありがとうございました。



## 台湾への臨床実習留学を経験した成果

私は2019年6月10日(月)から28日(金)にかけて台湾の輔仁カトリック大学の臨床実習に参加しました。参加人数は私を含め佐賀大学医学部医学科6年生の4名でした。本留学プログラムでは、輔仁大学の医学生が実習をしている3つの病院を各病院1週間ずつ回り、合計3週間の実習を行いました。私が本プログラムに参加した理由は、自身の発展途上の英語力を向上させたい、4年次春にハワイ大学ワークショップに参加した際、海外の医学部の講義は体験できたものの、病院での実習はできなかった、そして5年次(昨年2018年)に輔仁大学から佐賀大学に来た留学生と実習を共にし、留学生との会話を通じて、台湾の医療、医学教育にとっても興味を持ったためです。私にとって4年次春のハワイ大学留学が初めての海外で、今回の台湾留学は2回目の海外ということで、今回も留学前はかなり不安でしたが、結果的に大変有意義な時間を過ごすことができました。以下に3病院で学んだ詳細をまとめます。

### 【1週目：国泰綜合醫院 Cathay General Hospital】

私は心臓血管外科(Cardiac Surgery)を選択しました。私はこの1週間、楊先生にお世話になりました。楊先生は日本に住まわれていたこともあり、日本語が上手で、私が英語で理解できないところは日本語で説明してくださり、大変助かりました。月・水・金曜日が手術日、火・木曜日が外来日でした。手術日は朝から手術の見学で、手術前に部長の喉先生から手術の説明をしていただきました。手洗いで手術に入ることはありませんでしたが、患者さんの頭側から間近で手術を見学することができました。外来日は午前中に楊先生のレクチャーを受け、午後は休みでした。(外来での会話は中国語で行われるので、見学しても退屈だろうから、代わりに病院周辺を観光したらどうかと楊先生から言われました。)

#### 【1日目】

虚血性心疾患に対する CABG (冠動脈バイパス術) の見学をしました。グラフトは大伏在静脈で、内視鏡を用いてグラフトを採取していたところが印象的でした。そして何より部長の喉先生が凄腕の先生で、午前10時から執刀開始で、午後1時前には手術が終わり、手術時間の短さにとても驚きました。

#### 【2日目】

午前中は楊先生から術後管理と ECMO(extra-corporeal membrane oxygenation)のレクチャーを受けました。その後、実際に ECMO を使用しているところを見学しました。午後は病院近くの観光名所をいくつか教えていただき、中山公園(孫文の記念館があるところ)に行きました。

#### 【3日目】

虚血性心疾患と大動脈弁狭窄症を合併した患者さんに対する CABG+AVR (大動脈弁置換術) の手術を見学しました。手術時間は5時間(午前10時から始まり午後3時には終わり)

とこれも手術時間の短さに驚かされました。ただ、同じ手術を 5 年生の時に佐賀大学病院の胸部外科で見学しましたが、手技に関しては(医学生目線ですが)そこまで違いはないように感じました。

#### 【4 日目】

午前中は楊先生から中心静脈カテーテルのレクチャーを受けました。様々な種類のカテーテルの説明を受けましたが、中でも台湾では糖尿病患者が多く、長期留置血液透析カテーテルの埋め込みをよく行うそうです。午後は体調を崩したので(その後風邪を引きました)、観光には行かず、寮で休んでいました。

#### 【5 日目】

午前中は中心静脈カテーテル留置を 3 件、午後は大動脈弁輪拡張症に対する Bentall 手術(大動脈基部置換術)を見学しました。カテーテル留置は 3 件とも長期留置血液透析カテーテルの埋め込みで、4 日目のレクチャーの通りと思いました。Bentall 手術は 5 年生の実習で見なかったので大変勉強になりました。

#### 【2 週目：新光呉火獅記念醫院 Shin Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital】

私を含め佐賀大学の学生 4 人全員が小児科を選択しました。多くの小児科の先生方にお世話になりましたが、特に新生児専門医の穆先生と小児アレルギー疾患専門医の王先生に大変お世話になりました。過去の報告書にもある通り、王先生は日本の医学部を卒業された後、しばらく日本で働かれていたこともあり、日本語が大変上手で、実習中の説明もすべて日本語でしていただきました。

#### 【1 日目】

午前中は病棟、NICU、外来などの病院の案内、午後は小児科の先生や台湾の学生と入院中の患児についてディスカッションをしました。1 週目に引いた風邪がまだ続いていたので、この日は早めに実習を終わらせていただきました。

#### 【2 日目】

朝の 7 時 30 分からのミーティングに参加しました。小児科の先生方が集まり、部長の先生が頭痛についてのレクチャーをされていました。中国語でのレクチャーでしたが、パワーポイントのスライドが英語だったので、内容はある程度理解できました。その後、穆先生の病棟、NICU、PICU の回診に付きました。午後は穆先生と一緒に、あるセレモニーに行きました。この病院を設立した新光グループ(台湾の有名な中核企業)の現理事長の呉東進理事長が、台湾の医療分野に貢献された功績により、今年、天皇陛下から旭日中綬章を賜られたそうで、その報告会のセレモニーに参加し、呉東進理事長にお目にかかることもできました。セレモニーの後は穆先生に連れられ、病院から少し離れた別棟の新生児室の見学をしました。穆先生の診察を見学した後、診察した患児の疾患について教えていただきました。個人的に印象に残ったのは臍肉芽腫の治療で、穆先生は硝酸銀焼灼療法を行っていると説明されました。台湾に留学する前、好生館の実習で小児外科を回った際、先生方から臍肉芽腫の

内科的治療は硝酸銀焼灼療法、ステロイド軟膏治療などで、外科的治療は糸による肉芽腫の結紮と教えていただきました。台湾でも日本と同様、硝酸銀焼灼療法が主流のようです。夜は穆先生に病院近くの居酒屋でご馳走になりました。

### 【3日目】

2日目同様、朝の7時30分からミーティングに参加しました。今回は若手の先生が蓄膿症についての症例発表を英語でされていました。その後、穆先生に付き、NICUで新生児の診察をさせていただき、その後、心エコー外来の見学をしました。午後は小児呼吸器疾患の症例発表会に参加しました。他病院の小児科の先生方も参加されていました。4人の先生が症例発表をされ、発表途中・後に今後の治療方針、検査について全体でディスカッションをされていました。夜は王先生に飲茶のお店でご馳走になりました。

### 【4日目】

午前中は穆先生と王先生の外来を見学しました。外来は一日約50人の患児を診なければならず、患児一人につき10分で診療をされていました。ゆえに朝9時から始めて、外来が終わるのは早くも夕方5時頃だそうです。途中、小児発達の検査の見学もしました。午後は特に何もなかったため、夕方から台湾の学生に夜市（台湾の屋台の集まり）に連れて行ってもらいました。

### 【5日目】

午前中は王先生の病棟回診につき、その後、VIP病棟の見学をしました。VIP病棟では入院費用が小児は7000NTD（約25000円）/日、大人は最高20000NTD（約70000円）/日、であるものの、いつもほぼ満室みたいです。この日の実習も午前中に終わり、お昼は王先生に病院近くのお店でご馳走になりました。

## 【3週目：耕莘醫院 Cardinal Tien Hospital】

私は神経内科を選択しました。過去に台湾に行かれた先輩方の報告書では、葉先生に付かれていたようですが、私の時は神経内科部長の劉先生に大変お世話になりました。劉先生は私以外にも、患者さんや部下など誰にでも優しく、私の稚拙な英語にもしっかりと耳を傾けてくださる紛れもない人格者でした。また劉先生だけでなく、多くの神経内科の先生方からマンツーマンの指導を受けることができました。基本的に、午前中は朝のミーティングに参加した後、病棟の回診を見学し、午後は外来や検査の見学をしました。台湾の学生は誰も回っていませんでしたが、研修医の先生と一緒に先生の回診に付いたり、レクチャーを受けたりしました。

### 【1日目】

朝8時から朝のミーティングに参加しました。朝のミーティングでは学生や研修医の先生のために、上級医の先生が受け持ち患者さんの発表を行いながら、その疾患に関連する検査・治療についてのレクチャーをされていました。1日目は、王先生が司会をされ、王先生の病棟の患者さん1人（脳梗塞）について、入院に至った経緯、行った検査・治療について

説明していただき、その後、t-PA と血栓回収療法の違いについてのレクチャーを受けました。ミーティングの後は、蔡先生の回診に付きましました。病棟の患者さんは脳卒中がほとんどで、蔡先生の受け持ち患者さんもすべて脳卒中の方でした。回診の前に患者さんのカルテを見させていただきましたが、すべて英語で書かれてあり、大変驚きました。回診が終わった後、蔡先生から CHA2DS2-VASc スコアと DOAC（先生方は NOAC と呼ばれていました）についてのレクチャーを受けました。午後は劉先生から神経内科の身体診察と病的反射についてのレクチャーを受けました。4年生の OSCE で学習したのからアドバンストなものまで幅広く教えていただきました。印象に残ったのは、認知機能の評価には JOMAC（Judgment、Orientation、Memory、Abstract thinking、Calculation）を用いていること、筋力評価には MMT ではなく MRC を用いていること、バビンスキー反射やチャドック反射以外にオープンハイム反射、ゴードン反射、シェーファー反射、ゴンダ反射などの脊髄反射について教わったことなどです。劉先生から認知機能の評価は中国語で行うので難しいかもしれないが、筋力評価や反射は実践してみようといわれ、2日目以降から実際の患者さんにこれらの診察を行うことになりました。

### 【2日目】

朝、病棟に来たら、ちょうど脳卒中の患者さんが救急外来に運ばれて来たので、劉先生と研修医の先生と一緒に診察に行き、筋力評価や病的反射の診察をさせていただきました。午後は例年、過去に先輩方がお会いされた葉先生の外来を見学しました。外来の患者さんのほとんどは認知症かパーキンソン病だそうです。見学の途中で、認知症のボランティアの方々が患者さんとお話するところを見学しました。このボランティアの方々は患者さんとご家族の方に対して、葉先生の診察待ちの間、病気の不安、今後の介護などについて相談にのってあげているそうです。ボランティアの方々の中に英語が話せる方がいらっしやっただので、患者さんとの会話を通訳していただきました。ボランティアの方々も過去に認知症の家族の介護をされていたそうで、その経験を活かそうとこのボランティアの仕事を10年以上されているそうです。台湾の医学生も大学のカリキュラムの一環で低学年のうちに見学に来るそうです。（佐賀大学でいう Early Exposure のようなものだと思います）ボランティアの見学は大変貴重な経験となりましたが、外来見学の大半は認知症ボランティアの見学で終わり、葉先生とお話する時間があまりなく、そしてこれが葉先生とお会いできた最初で最後の機会となってしまいました。

### 【3日目】

1日目同様に、朝8時から、朝のミーティングに参加しました。司会は林先生がされ、dizziness と mild headache を主訴とする患者さんについて、PBL形式に研修医の先生方と一緒にディスカッションをしました。ディスカッション後、この患者さんは Ramsay Hunt 症候群とわかり、アシクロビルの使用法、dizziness を主訴とする患者さんの鑑別疾患についてのレクチャーを受けました。ミーティング後は司会をされていた林先生の回診に付き、実際にその Ramsay Hunt 症候群の患者さんにもお会いしました。午後は劉先生の

ボトックス注射（ボツリヌス注射）の見学をしました。これは脳卒中後に痙縮や眼瞼痙攣などの後遺症に悩む患者さんに対して行われる治療で、筋を弛緩させることで体の動きを良くするそうです。ボトックス注射は 5 年生の実習では見なかったもので、とても勉強になりました。

#### 【4 日目】

木・金曜日の朝は病院全体で会議があるらしく、4 日目は内科全体の会議がありました。内容は昨年 of 病院の収支についてでした。しかし、木・金の朝の会議では発表に加え、パワーポイントも中国語だったので、残念ながら内容はほとんど理解できませんでした。その後、劉先生の回診に付き、お昼は医局会に参加し、医局会の後、抄読会がありました。抄読会では林先生が NEJM の CHA2DS2-VASc スコアと DOAC についての論文を発表されていました。午後は先生が外勤のため実習はありませんでした。

#### 【5 日目】

朝は病院全体の会議があり、症例発表と臨床倫理についての発表がありました。その後、陳先生から脳波とてんかんについてのレクチャーを受け、その後、脳梗塞後にてんかんを発症した患者さんの診察に行きました。午後は劉先生の外来を見学しました。劉先生の外来では認知症の患者さんがほとんどで、その日の外来も、8 割がアルツハイマー型、1 割が脳血管性、1 割が前頭側頭型の認知症の患者さんでした。会話は中国語でしたが、劉先生に患者さんについて 1 人 1 人丁寧に説明していただきました。

#### 【まとめ】

留学前のオリエンテーションで台湾の医療は約 10 年前の日本の医療と教わりました。10 年前といっても大昔の日本の医療ではなく、実際に実習してみても、電子カルテの普及率や医療器材の性能など日本の医療に劣る部分もあるものの、全体としてみれば、高水準な医療が提供できているように感じました。また英語についてですが、ハワイ大学では先生方がゆっくり英語を話してくださったので、私でも十分理解できましたが、今回の台湾留学では、先生も学生も母国語のように英語を流暢に話していました。そのため、**Speaking** もまだまだですが、**Speaking** 以上に **Listening** が絶望的にできませんでした（勿論、私の英語力の低さに配慮してゆっくり話してくださる先生方も大勢いらっしゃいましたが）。3 週目には台湾の学生から、私の英語もかなり良くなってきたと言われましたが、それでも台湾の学生や他の佐賀大学の学生の英語に比べれば足元にも及びません。私は元々英語が苦手で、大学 3 年生の時、初めて英会話に通うようになりました。その後 4 年次の春にハワイ大学留学、そしてハワイ大学留学後も自身の英語力の低さに痛感し、英会話教室、TOEIC、医学英語の勉強等継続して行ってきました。しかし今回の台湾留学で、まだまだ努力不足と感じました。私は学生の中にハワイと台湾の 2 つの留学をするという大変貴重な経験ができました。これらの経験を活かすため、医師になった後も、再度留学したいと考えています。そのためにも、今後も医学の勉強と同時に英語学習も怠らないよう努めたいと思います。最後に、留

学中お世話になった台湾の先生方、学生の皆さん、留学中に色々と助けてくれた佐賀大学の皆さん、そして今回の交換留学を支援して下さった佐賀大学関係者の方々に心から感謝申し上げます。

## 「台湾への臨床実習留学を経験した成果」

今回、台湾に臨床実習留学をするにあたり、参加前は医学英語や知識について不安もありましたが、帰国後振り返ってみると、私にとってこの経験で得られたものの大部分を占めるのは、医療以前に、人と人との関わり方やコミュニケーション能力、異文化との交流で生まれる新たな見解や感受性といった、より根源的な学びであったと思います。台湾に到着し、これまでに経験したことのないような熱気と湿度の中、台湾の学生に暖かく迎えて頂き、思っていた以上にカルチャーショックを感じながらの留学スタートとなりました。早速、街を探索すると、匂い、人の佇まい、建物の建築など、台湾独自の衣食住のあり方を肌で感じました。道端には、「中国での臓器売買反対!」といったインパクトの強い張り紙が見られたり、道路では原付バイクに両親と幼い子供達が4人乗りでビュンビュン走っていきます。横断歩道を青信号で渡ろうとしても、構わず車やバイクが突っ込んでこようとします。台湾の学生にその度に質問したり話を聞いたりしながら歩いているだけで、台北の文化や歴史についても多くを学ぶ機会となりました。

病院実習が始まると、今度は医療制度の実態や、疫学、倫理観など、今度は医学からの視点で学びが深まりました。最初の週に回った耳鼻科では、手術室の清潔管理や患者さんへの対応の仕方など、日本との違いも多く感じました。医学的用語は全て英語で、プレゼンテーションやカルテ、テキストも英語が標準となっており、学生もしっかりと医療英語が身につけている様子には感銘を受けました。台湾では高齢者の約80%が結核に感染していることや、インフルエンザが6月でも猛威を振るっていることなど、驚くような事実も多々ありました。台湾の方はとても親切だとは聞いていましたが、どこに行っても先生方や学生、スタッフの方々、皆さん本当に親切でよくして下さいました。

2週目の小児科実習では、まさかでしたが人生初のインフルエンザ発症で数日欠席してしまいましたが、産後の母親と新生児を受け入れる特別な宿泊施設の存在や、不妊治療、高齢出産の影響など、日本との相違点・類似点が興味深かったです。

3週目は家庭医科での実習で、山に住む原住民の訪問診療に同行しました。食生活や、飲酒、伝統的な文化、そして貧困や労働環境の影響で生活習慣病や痛風を発症される方が多いとのことでしたが、痛風結節の増悪の症例は特に印象に残っています。手足の関節がポコポコと腫れて、日常生活にも支障をきたしている方でした。引率してくださった先生が、どれだけこちらが医療を提供しても、伝統文化や生活習慣、労働環境によって改善が見られない症例が多いことをとても無念そうに、半ば諦めの目



をされておっしゃっていたのが心に残っています。台湾の学生たちとはどこの病院でも実習後一緒に食事をしり、台湾特有の遊びや文化を経験したり、毎日が本当に充実した3週間でした。参加前は全く理解できなかった中国語も、音に慣れ始め、繰り返される単語を拾えるようになると、外来の時でも想像力で内容を推測できるようになり、何事も興味とやる気を持って参加することが大切だと感じました。

今後を見据えて今思うことは、将来日本で働くにせよ、臨床や研究で留学するにせよ、やはり海外への留学経験で学び得たものは必ず役に立つということです。日本にも、最近ではアジア、西洋問わず多くの外国人が移住しており、様々な言語が飛び交う場面も日常となってきた実感があります。私は今後とも海外で勉強できる機会を見つけたら可能な限りそのチャンスを掴みたいと強く思います。正直今回の留学では、苦しいことや辛いこともありましたが、その一見ネガティブに感じとられる経験こそ、多くの学びをもたらします。次はどここの国に行くことができるか、現段階ではわかりませんが、今回の留学経験を経て、アジアの国々への興味はとても増しました。今後とも積極的にチャンスをもものにできるよう、しっかりアンテナを張りながら、日々精進したいと思います。大変貴重な経験をさせて頂き、この機会に関係するすべての方々には感謝の念でいっぱいです。